藤女子大学　No.66

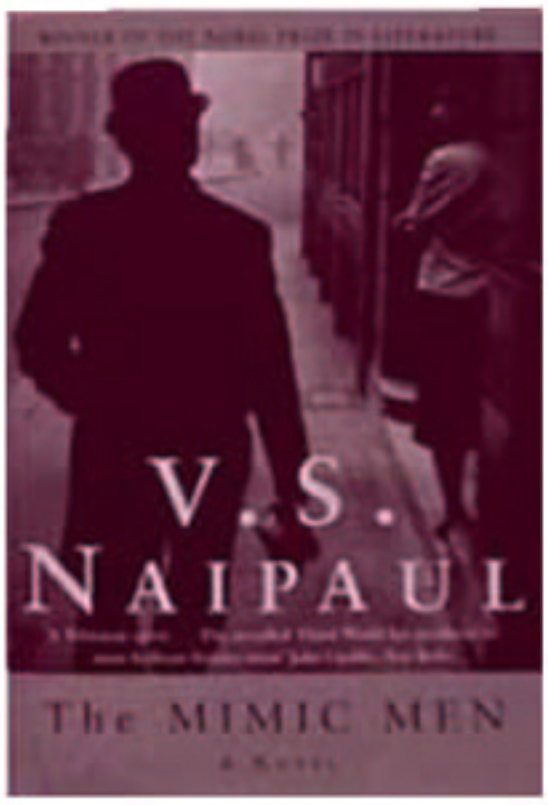
図書館だより

'03.09

インド：内なる他者として

野手　修（文化総合学科）

米国での留学を終え日本に帰国し、少したったある日のこと、英語も堪能で海外の事情にも詳しい人物がもらした一言にある驚きを感じたことを覚えています。それは「でもやっぱりあのアクセントがね…」という、インド人特有の英語の発音の仕方、言い回しを揶揄するものでした。その言外の意味は今でも定かではありませんが、現在「あのアクセント」を話す人々は比較的限られた階層で、その数も最近ではだんだん少なくなってきていることもあり、「インド人＝アクセントのある英語」なる評価は正しくなくなりつつあるのです。英語で小説を書くインド人の作家が高い評価をうけた作品を立て続けに発表していた時期があったこともあり、彼らの英語能力に疑問を差し挟む余地は全くないように考えていたので、上記の一言は全くもって意外でした。



参考資料
V.S.Naipaul 氏の作品
・インド―傷ついた文明　花川館 935.9 / N28
・インド―新しい顔　本　館 935.9 / N28 / 1,2
・The return of Eva Perón　本　館 935.9 / N28r
他にも多数所蔵しています。

インドのみならず、アフリカや東南アジアの国々が英国やフランスの植民地支配からの脱却を果たしてからもう半世紀が過ぎています。その間に形づくられてきた新しい主体を私たちの多くは理解するどころか、その存在にいまだ気づいてもいないのが現状です。独立後多くの国々で独自の国家運営がなされる一方で、宗主国との密接な関係が保たれてきましたが、この関係は政治的にも文化的にも機微なため、外部の者には

目　次

インド：内なる他者として ……1
野手　修
司書の卵 図書館情報学課程を受講している皆さんにお聞きしました!! ……4
新任スタッフ紹介 ……6

理解しにくいこともその一因なのかも知れません。例えば日本ではなじみのうすいクリケット。本来イギリス特有の紳士のスポーツが植民地時代にインドに輸入され、その後大衆のスポーツに様変わりしました。定期的に国際試合が開かれテレビで放映されるのですが、対イングランド戦や対パキスタン戦となると大変な興奮のようです。同様に、英文学が同様にインド社会に導入され150年以上もたつのですが、これもまた複雑な受容がなされた模様です。残念なことに、このトピックはわたしの専門外で詳しいことはわかりません。ただし私自身の体験として、米国の大学であったインド人学生の一人が「ネイティブよりうまく英語を書かなくては」と言っていたことを今でも時折思い出します。つねにネイティブをお手本としていた私にとって、これはとても大胆な考え方だと思いました。内なる他者の存在がもたらす緊張、対立、矛盾を自らのエネルギーに変えてしまう柔軟な自己を後植民地、いわゆるポスト・コロニアル状況を生きる人々は共有するように思われます。

ポスト・コロニアル状況下の主体は、西洋的な“分割のできない”(in-divisible)、閉じられた個人ではありません。同時に伝統社会によくある頑迷な自己でもないようです。他者を独特のコミュニティー感覚で取り込み、自分の一部としていくことで(これには「他者」も逆らえないでしょう)他者との政治的交渉を試みたガンジーの受動的な抵抗の歴史にみられるように、ポスト・コロニアル状況下の主体は「異な物」を内包する、「ハイブリッド」な構造をもつといわれています。では一体このポスト・コロニアル状況の主体をどう解

すべきなのでしょうか。ドイツの観念論の伝統のなかでは自己＝自己という短絡的な認識を回避するために他者性の介入の必要性がみとられているようですが、それが異なる文明、「他者」である場合いかなる「個」が可能となるのでしょうか。

現地調査のため南インドに滞在中、知人の結婚式によばれカルカッタ(当時、現在はコルカタ)を訪れたことがあります。今とは異なり日本が世界の経済大国で利潤追求に明け暮れていた当時、英語でインド人と時を過し、北部の人々にとって理解の困難な南部のタミル語を学ぶ一学徒を、知人の親戚や友人達は若干の好奇心と親しみのこもった暖かさで迎えてくれました。普遍的な教養教育を重視しつつ、同時にインド文化の重要性をとりわけ強く意識する知識層の多くすむカルカッタは英国の影響が今でも色濃く残る社会ですが、同時に植民地支配を体験した人々の記憶が一般的な価値観にくっきりと反映された後植民地社会でもあります。ですから西洋的な知の伝統を修得することにより自己を疑似西洋人として作り上げること自体はベンガルの教養人にとり技術的にさほど困難ではないのですが、それを無批判に行うことに対してはある種の抵抗があるようです。文明に

対し複雑な意識を持ち、世界的にも高い評価をうけている知識人を数多く生み出しているベンガルの中・上流社会に接したことは私にとり貴重な体験でした。しかし、それはインドと日本社会の違いを感じさせる象徴的な出来事でもありました。

こんな出来事の後、マドラス（チェンナイ）へ帰る列車の旅の途中のこと。2昼夜近くにわたる長い旅程のあいだ、都市から村へと風景が変わり、人々の話す言葉や服装もめまぐるしく変わる中、そばに居た夫婦がチャパティー（小麦粉をこねて平たくした食べ物）を差し出してきたのです。インドでは今でもカースト制が残存し、特定の血縁集団の外部とは婚姻はおろか食べ物の交換も控えられるのが普通なので、他人から食べ物をもらうには抵抗がありました。しかしながらカルカッタから乗り合わせた夫婦にとっては、私やその他の乗客はその場かぎりとはいえ、一時的な「同胞」のようなものだったようです。英語を（そしてタミル語さえも！）話さない夫婦から無言で手渡されたチャパティーを食べながら、米国の大学で学んだインド的「個」とは何かを再び考えてみました。それは西洋的個人とは正反対の"分割可能"（divisible）な個人であり、他者に開かれた性格を持つ主体です。食べ物、空間、習慣を共有しないのは、異なるカーストがそれぞれのアイデンティティーを維持するためなのですが、その根底には外部的要因に影響をうけて絶えず変化する流動的な身体観があるといわれています。そのため様々な行為（カルマ）をつうじて個人が他者と交わり、その影響を受けることは不可避であり、かつ社会で生きる以上不可欠であると一般に考えられているのです。列車で旅をともにすることも行為（カルマ）を通じた一種のコミュニケーションであったのでしょう。他者性の除外により自己のアイデンティティーを保とうとする排他的な態度と、自らとは質的に異なる他者、未知なる物を受け入れることのできる寛容な態度は一見相容れないものようですが、それが共存できるのは独自の主体の観念が社会生活の根底にあるからなのだと思います。

このような「個」にかかわる伝統的な形而上学が現代インドの主体を理解するうえでの最終的な回答を提供してくれるのか否か、現在のところ私には分かりません。しかしながら、西洋的観点からみれば他者である自己を別の他者（インド）により相対化することにより、それまであった閉塞感が解消され、ある種の開放感を体験できるようになったことも事実です。現代インドにおけるポスト・コロニアル状況の体験は、私の内なる他者として、日本的自己を別の角度から考えるうえでの一つの重要なヒントを与えてくれるように思えるのです。

司書の卵

図書館情報学課程を受講している皆さんにお聞きしました！！

いつも図書館を利用していただきありがとうございます。本学の図書館は全国的にみても利用率の大変高い図書館なのは皆さんご存知でしたか。 私達はこのことをとても喜ばしく感じています。 その一方で私達のサービスは、利用者にどのように映っているのかを知りたいと思っていました。

そこで利用者の中でも特に図書館に関心を持っているであろう、図書館情報学課程を受講している方に“図書館について普段疑問を感じていること・興味関心のあること”等を出してもらいました。今回は現在4年生に在籍中で、図書館情報学課程受講歴3年の皆さんに、ご協力いただきました。

自由な形式での回答だったため、色々な疑問・意見がありましたが、その一部をここでご紹介します。

★購入希望の資料の購入はどのようにして決めるのでしょうか？
★購入希望の資料以外の選書はどのように行われるのですか？
★ベストセラー本の扱いが知りたいです。

資料の選書については、皆さんも気になるポイントだと思います。特に購入希望については、自分の希望した資料が入るととても嬉しいでしょうし、購入が見送りになると、“どうしてですか…”と職員に問いたくなるときもあることと思います。

実際選書のポイントというのは、言葉でうまく表現するのが難しいのですが、今回のアンケートの中だけでなく、よく皆さんからの質問があることなので、少し触れておきましょう。

- 選書の判断基準は、本学図書館の蔵書（資料）として、適切であるかどうかである。
- 講義内容を参考にし、不足している分野の補充を心掛けている。（本館―社会科学系・歴史系、花川館―社会福祉系・栄養学関係 etc.）
- 文庫本でも、それに類似したような資料でも資料的な価値があれば、購入する。
- 卒論関連の資料は積極的に購入したいと考えているが、あまり特殊な資料（古書等で入手困難、この先の利用が見込めない資料etc.）の場合は購入を見合わせる。
- 購入希望図書には、数量制限はない。購入に適当であると判断されれば購入決定となる。
- いわゆるベストセラーに関しても、その資料の内容によりけりで、購入を判断している。特にどちらかの館で重点的に揃えているわけではない。

選書に関しては、現在2名の担当職員が中心となって、利用者の皆さんからの購入希望の資料や図書館側で選んだ資料を、週に一回のペースで選定しています。 今年度出された購入希望は350件を上回り、昨年度の総数を早くも超す勢いです。残念ながら購入が見送られたものもありますが、利用者の皆さんの要望はかなりかなえられているのではないかと思います。

現在のように購入希望のシステムが活性化することは、図書館にとってもとても喜ばしいことです。選書の流れがスムーズにいくためにも、購入希望の用紙を出す前に、OPACで既に所蔵されているものかどうかの確認をお願いします。

もう一つ、回答の中で多かった質問を紹介します

★なぜ、入館システムを変えたのですか？
★新しい入館システムでは前と比べて何が便利になったのですか？

新学期がスタートして、始めて図書館に来た時、皆さんはきっと驚いたことでしょう。「えっ！何これ？学生証が必要？」という声がよく聞こえました。図書館は、この4月から、入館のシステムが変りました。以前は、ただバーを押すだけで入館できましたが、新しいシステムでは、利用証（学生証）を通してゲートを開けてから、入館するようになりました。今までの入館が容易だったためか、面倒、と感じている方が多いようです。

新しい入館システム、皆さんにはあまり歓迎されていない様子ですが、なぜ変えたのかというと、以前のシステムは設置以来２０年を経過し、補修部品がなくなったために、現在のシステムを導入することになりました。新しいシステムの良い点は、入館の際のチェックにより、正規の利用者以外の入館を完全とはいえないまでも防ぐことができるようになりますし、利用者の入館の動向を身分別、曜日や時間帯別等で把握できるようになりました。具体的な入館の動向は、効果的に図書館のサービスや業務を進める上で、大変参考になります。

新しいシステムを導入したことで、皆さんの手を少し煩わせることになりますが、入館した皆さんによりよいサービスができるよう、資料や情報提供サービスの充実を今後も目指していきたいと思っていますので、これからも大いに図書館をご利用ください。

他にも様々な質問がありましたが、紙幅の都合上今回は掲載できませんでした。次号以降少しずつ回答することができれば、と考えています。

最後になりましたが、今回の企画に協力してくれた図書館情報学課程を受講している皆さん、どうもありがとうございました。

新任スタッフ紹介

本館情報サービス係　長岡　登美子

十年程前（うわ、自分で書いててビックリしたぞ）の夏、ピチピチの藤大生だった私は、空き時間をよく書庫2層で過ごしました。当時はまだ集密書庫がなく（あそこ学食だったんですよ）1層で行き止まりでしたから、通過する人も少なく、静かでひんやりで古い本の独特のにおいに包まれた書庫は、そりゃもう格好の昼寝場所だったものです。誤植じゃないですね。昼寝。そんな私が春から閲覧カウンターに我が物顔で座ってるんですから、これはふしぎの域を越えて既に笑止千万！です。「次は期限に遅れないでネ」なんてお姉さんぶってる場合なんでしょうか。いいんです。皆そうやって大人になるんです。もちろんカウンターでは眠ったりせず（当たり前か！）キビキビ？働くつもりでいますので皆様どうぞ長い目で見てください！てへ。

花川館情報サービス係　渡部 寛子

図書館で働き初めてから毎日があっという間に過ぎています。私は今年の3月まで花川の学生だったので図書館のこともわかっているつもりでしたが、働き始めてから様々なことを知りました。卒業してからあまり時間が経っていないのに、新しくなっていることもあり驚きました。そして、学生のとき図書館を利用していても図書館の端から端まで歩いたことはなかったのではないかと感じるくらい、色々な本があることを実感しています。

まだまだ一日一日が新しい発見と勉強の日々で、支えて下さる方々の多さを感じて過ごしています。わからないことも多く、ご迷惑をおかけすることも多くあると思いますが、多くの皆様に出会えることを楽しみにしています。よろしくお願いします。

藤女子大学 図書館だより 第66号 2003.09

発行者　札幌市北区北16条西2丁目　藤女子大学図書館
TEL 011−736−5407　FAX 011−709−4770
http://library.fujijoshi.ac.jp/index.html